

小学校社会科における見方・考え方の育成方略

— 単元「地図とはどのようなものでしょうか？地図について考えてみよう！」を事例として —

池野範男・竹中伸夫・田中 伸・二階堂年恵・川上秀和

(2004年9月30日受理)

The strategy for developing a new view of society in elementary social studies education:

Unit plan “Considering maps, could you think what’s map”

Norio IKENO, Nobuo TAKENAKA, Noboru TANAKA, Toshie NIKAIDO and Hidekazu KAWAKAMI

The purpose in this paper is to develop the strategy and lesson plan for teaching elementary social studies to introduce a new view of society.

We developed the unit plan “Considering maps, could you think what’s a map” which is organized so that a student’s view of map might be raised from a low level to a high level.

We have prepared two views of map to plan the unit. One is a copy-theory of map, i. e., a view of map that a map copies reality. Another is a composition-theory of map, i. e., a view of map that a map is selected and constituted of portions and elements in reality.

As students at fourth grade have a copy-theory in everylife, we have planed the social studies lesson that they acquire a new view of map, a composition-theory of map, and practiced the plan in the attached Mihara elementary school, Hiroshima University.

Key words : Elementary social-studies, View of society, The copy theory or composition theory of map

キーワード：小学校社会科，見方・考え方，地図の写像論・構成論

I. 小学校社会科における見方・考え方とその位置

小学校社会科は、「民主的，平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」¹⁾ことを目標としている。この目標は，知識・理解，能力・技能，興味・関心という領域を視野に入れた広範囲なものである。

平成10(1998)年の学習指導要領は新たな方針を示した。小学校社会科はその重点を，知識・理解の獲得から，見方・考え方の獲得へ変えた。

この学習指導要領の改善の基本方針では，このことを「網羅的で知識偏重の学習にならないようにするとともに，社会の変化に自ら対応する能力や態度を育成する観点から，基礎的・基本的な内容に厳選し，学び方や調べ方の学習，児童生徒の主体的な学習を一層重視する。」²⁾と表し，内容の取り扱いにおいて，「児童

の発達段階を考慮し，社会的事象を公正に判断できるようにするとともに，個々の児童に社会的なものの見方や考え方が養われるようにすること」³⁾を求めている。社会科は学習指導要領上では，内容構成をこれまでの知識・理解の獲得を中心としたものから，問題解決力とともに見方・考え方の獲得をめざしたものへ質的に転換したことを示している⁴⁾。

しかし，実際の社会科授業がこのような質的な転換をしているかと問うならば，していないと答えるのが妥当であろう。内容構成の論理が転換した現在も，依然と知識・理解が重視され，それを中心に教える授業が一般的であろう。

その要因には，次の三つが考えられる。一つ目は，見方・考え方の育成とはどうすることが不明確であること，二つ目は，見方・考え方の獲得をめざした授業構成原理の研究が未熟であること，三つ目は，この見方・考え方の獲得，あるいは，変容を評価する具体

的な評価研究がなされていないこと、である。

これらの問題点の克服が現在、小学校社会科教育研究の課題として示されている。この課題に対して本研究は、社会科においては見方・考え方の育成・獲得こそが、民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質を育成するものであるという観点から取り組もうとするものである。

見方・考え方育成の授業と評価の開発に関して筆者たちは中学校社会科公民的分野において、選挙制度に関する「見方や考え方」を「国家・社会の形成者」という教科目標の実現という観点から選定し、選挙制度にかかわる生徒の見方・考え方の成長を促進する「批判的・制度的学習」を提案し、網羅主義的な制度学習の問題点を克服する授業構成と評価方法を示した⁵⁾。

筆者たちはこの研究成果を発展させて、小学校段階においても見方・考え方育成が可能なのではないか、かつ学校教育において基礎となる小学校段階においてこそ特に重要ではないかと考えている。

その際鍵となる問題は、次のようなものであろう。小学校社会科でめざす見方・考え方の育成とはどうすることか、どのような育成方略があるのか、また、見方・考え方の育成のために授業はどのように組織すればよいのか、あるいは子どもたちの見方・考え方の変容をどのように評価するのか。

これらの問題を解き明かしてゆくためには具体的な授業開発と実践が必要である。そこで地図学習を事例にして、これらの問いに答えつつ、小学校社会科における見方・考え方の育成方略を究明することにした。

II. 小学校地図授業の現状と課題

地図に関する学習は、小学校社会科学習の出発点になっており、単元や授業のはじまりでたびたび行われ、問題の意識の形成や問題設定という役割を持っている。また、授業の展開でも重要な働きをし、問題の解決や追求において子どもたちが考える手段となり、子どもたちの新しい認識形成や、見方・考え方の育成に寄与するものである。

社会科における地図の取り扱い方とその利用には、二つのタイプがある。第一のタイプが手段としての地図の利用であり、第二のタイプが内容としての地図の利用である。

第一のタイプは、地図利用を小学校社会科において、重要なものと位置づけた昭和43(1968)年小学校社会科学習指導要領の解説『指導書』に次のように、明解に述べられている。地域観察の指導と結びつけて、「観察と地図との照合、つまり実地の観察を地

図の上で確かめるという操作」⁶⁾を行い、地域社会の理解の基盤を作るとしている。このような地図利用についての規定は、地図を社会のわかり方の手段として利用する。そのため、地図の約束事や記号を学習し、地図に示されている内容を読み解く作業、読図能力を育成することをめざす。そのような能力が形成され、活用ができると、「抽象的になりやすい学習を具体的に」、「社会事象や事物を注意深く観察するようになる」、「事象や事物を関係的に見ることができるようになる」、「人間の営みを深く考えさせることができる」という効果が期待できるという⁷⁾。

このタイプでは、地図は、「現実の地表現象を、ある観点から、また記号、縮尺その他の方法を使って表現したものであり、写真、映画ほど現実に近い姿を表現したものではないが、文章などによる説明よりはるかに具象性をもった資料」⁸⁾であると規定される。このような明確な規定は平成10年小学校社会科学習指導要領『解説』には見られないが、地図活用の推奨箇所の記述⁹⁾からすると、このような規定を踏襲しているものと推定される。

第二のタイプは、手段としての地図の内実を学習することである。地図が現実をどのように示すのかである。この答えにはおおきく、二つがある。一つは、「地表の景観それ自体が地図という表現形態をとって」¹⁰⁾おり、客観的、写実的であるという見方である。もう一つは、地図は「人間というフィルターを通して人間化された地表景観」であり、「主体的な意志をもった人間が関与している」¹¹⁾主観的、構成的であるという見方である。

本研究で問題にしようとしている地図授業は、第二のタイプに関わる授業である。『教育科学社会科教育』(1990年9月号)特集「地図指導の基礎基本」で示されている小学校各学年の地図指導内容は、客観的、写実的な見方に立って行われている。たとえば、小学3年の指導では、「身近な地域をめぐる様々な学習の中で、具体的な目印を自分たちなりに記号化していく作業」をしたり、「地図と実際の状況を照らし合わせてみる活動」をしたりしながら、地図の客観性、写実性を認識するようにしている¹²⁾。

現在ほとんどの小学校社会科の地図授業は、このように地図を客観性、写実性と見ることを基本としている。それは、学習指導要領が現実を「写し取る」という写像論の立場をとっているからでもある¹³⁾。

しかし、地図は「(1)必要とみなされる事象と不必要と思われる事象の選別、(2)必要とみなされる事象の誇張化、(3)同種の事象の概括化と系統化、(4)事象の記号化、(5)実際の地表では感覚によっ

小学校社会科における見方・考え方の育成方略－単元「地図とはどのようなものですか？地図について考えてみよう！」を事例として－

てとらえることができない抽象的事象の付加、(6) 注記（地図の中に文字を書き込むこと）など¹⁴⁾の人間による操作が働き、主観的、構成的なものである。

このような見方を小学校社会科ではほとんど、教えることをしない。客観的、写実的な地図の見方を前提にしており、地図は、現実を模写している、あるいは、写し取っているという常識的な見方を子どもたちに形成し、社会についての見方を拡大・成長させようとはしていない。むしろ、「子どもの見方や論理に即した」指導を勧めている¹⁵⁾。

以上のことより、筆者らは、小学校社会科授業において地図は、地域社会の認識のための手段として活用しているが、地図の見方を客観的、写実的な見方に固定化し、子どもたちの見方・考え方を拡大・成長を阻んでいると判断する。このような阻害状態から、子どもたちを解き放ち、地図の見方・考え方を拡大し成長させると、社会の見方・考え方も拡大し成長するのではないかと考えるものである。

本研究はこのような考えのもと、子どもの見方・考え方を拡大するように組織する地図に関する小単元の開発・実践・評価を試みたのである。

Ⅲ. 小単元「地図とはどのようなものですか？地図について考えてみよう！」

1. 本研究の目的

本研究は次の二つを目的として設定している。

第一は、小学校社会科における見方・考え方の育成という課題に答えるため、開発した地図の授業を通して、その育成方略を提示すること。

第二は、小学校段階において見方・考え方の育成が可能であることを確認するため、開発した地図の授業を行い、成果を明らかにすることである。

また本研究の結果として期待されることは、次の三点である¹⁶⁾。

第一に、見方・考え方を育成する小学校社会科授業として地図に関する授業を作成することができることを示すこと。

第二に、地図の見方・考え方の育成を認識の変容として組織する授業構成が可能であることを示すこと。

第三に、複数の地図の見方・考え方を提供することによって、授業後に子どもの認識のレベルが感覚的認識から価値的認識・社会的認識へとより高次の段階に変容することを明らかにすること。

本研究は授業開発と評価研究を一体のものとして行ったが、本稿では主に授業開発の部分を提示する。

2. 小単元の開発過程

地図に関する小学校社会科の小単元を開発するとき最も重要なものはこれまで述べてきたように、見方・考え方である。これまでもっていたものとは別の見方・考え方、全く異なった見方・考え方、新しい見方・考え方を準備し、子どもたちの認識において見方・考え方を変容させ、社会に対する見方・考え方を大きく拡大、成長させることである。

そのためには、地図に対する見方・考え方を複数準備することである。本研究で準備したものは、写像論、構成論と呼ぶ二つの地図の見方・考え方である。

これまでの地図授業では、地図は社会の現実を写し取っていると考える写像論の見方・考え方を意図的に学習させたり、それを前提としたりしていることが多く、大勢を占めていた。

このような写像論の見方・考え方に対して、地図は、特定の目的・意図のもとに、現実を加工し構成したものであると考える構成論の見方・考え方¹⁷⁾を新たに設定することにした。

地図に対する写像論の見方と構成論の見方という二つの見方・考え方を設定すると、写像論の見方は子どもたちにおいて、日常的・常識的に獲得されているので、もう一つ別の見方として、構成論の見方を獲得することが、開発する小単元（授業）の主たる目標になる。

筆者たちが、開発する小単元（授業）の目標は次のものとなる。

第一は、地図に関する見方・考え方として、写像論の見方と構成論の見方の二つを設定すること、第二は、小単元で子どもが新たに獲得する地図に対する見方・考え方は、構成論の見方であること、第三は、子どもたちの新たな見方・考え方を獲得しうる教材と、学習過程を設定することである。

これらを具体的に示すと、次の①～③となる。

①地図が目的に応じて作られたものであることに気づかせ、地図に対する認識には写像論のほかに、構成論の考えもあることを理解する（構成主義的な認識の枠組みを子どもに示す）。

②小単元（授業）を、地図に関する知識の獲得を目標とするのではなく、地図に対する見方・考え方という方法の獲得をめざしたのものとして構成する。

③地図を目的に応じて使い分けるといった社会的認識の形成と、それに伴う資質を増大させる。

このような目標設定の下で、筆者たちは、広島大学附属三原小学校の子どもたちに社会科授業をすること、また、三原市近郊に生活していることを前提にして、小単元（授業）の開発を行った。

3. 小単元「地図とはどのようなものでしょう？地図について考えてみよう！」の全体構造

(1) 見方・考え方の構造

開発した小単元は「地図とはどのようなものでしょうか？地図について考えてみよう！」である。この小単元の概念構造図を次頁に示した。

地図についての二つの見方・考え方を上・下に分けて示してある。下の地図写像論は、写像論の見方を示しており、地図は、地域の本物の姿を表しているという考えにもとづいて地域にあるものすべて、正しく示している。地図はその地域を写し取ったものとして我々は使うので、できるだけ詳しいものがよいと考えられる。

一方、上の地図構成論は、構成論の見方を示しており、地図は、地域の情報を取捨選択してのせているという考えにもとづいて地域にある情報を選択・加工して示している。地図はその地域の情報を変え再構成したものと我々は使うので、目的や場面に応じて使うのがよいと考えられる。このような二つの地図の見方を獲得し、使えるようにすることが小単元の目的である。

このような地図の見方を育成するためには、子どもたちがすでにもっている下の地図写像論から上の地図構成論へ小単元を組織することが必要である。このように組織することにより、子どもたちの地図の見方を拡大し、成長させるからである。

(2) 小単元の構造

ここで開発しようとする小単元（授業）は、子どもたちが、日常的・常識的にすでにもっている見方・考え方とは違う別の新しい見方・考え方に出会うこと、その新しい見方・考え方を十分に獲得するようにすること、すでにもっていた見方・考え方と、新しい見方・考え方との違いを明確にすること、新しい見方・考え方を他の事象にも活用できるようにすることを保障して、構成される¹⁸⁾。

小単元は次のように構成することにした。すなわち、子どもたちはまず導入段階で、地図に対する写像論の見方を確認する。展開では、子どもたちがすでにもっている写像論の見方とは異なる地図の構成論の見方に出会う。つづいて、構成論の見方の吟味・検討をする。さらに、写像論と構成論の二つの見方を示し、比較する。終結では、子どもたちに、写像論の見方から構成論の見方に、地図の見方・考え方が変容したことを確認させる。

本小単元の学習過程を子どもたちの認識の成長過程としてみた場合、地図に関する写像論の見方から構成

論の見方へと変化させるように構成している。子どもたちは、新しく構成論の見方を獲得することによって、社会事象の見方・考え方においても、地図を使った学習を行った場合と同様、写像論的な見方・考え方から、構成論的な見方・考え方へと見方・考え方を変容させて学習するのではないかと考える。

小単元の学習過程は、地図には町のものすべて・正しくのせているのか、作った人のどのような考えが示されているのかをそれぞれ吟味・検討しながら、地図とはどのようなものかという中心発問を追求していくものにし、子どもたちがすでにもっている写像論の見方にもとづいて、その基本的な考え、その地域をすべて、正しくのせているというものから、新しい見方に出会うものとなる。

(3) 小単元の展開構造

小単元は、導入、展開1～5、終結の7つの部分から構成される。導入から展開4まで、展開5から終結まで、各1時間の授業として計画した。

導入では、児童がすでにもっている地図写像論を確認する。次に地図に掲載されていない情報を取り上げ、子どもに、すでにもっている地図に対する疑問を投げかける。その上で「地図とはどのようなものか？」という主発問を提示する。

展開1では、地図には地域の情報すべてが掲載されているかという発問のもと、地図に掲載されていない事例を子どもたち自ら探し出す過程を経て、地図は地域の情報を取捨選択してのせているといった主張を認識させる。

展開2では、地図に掲載されている情報は地域の事象を正しくのせているかといった問いのもと、形・大きさ・位置などの視点で地図を読み直す過程が組まれる。ここでは地図が必ずしも地域の情報を正しく掲載してはいないといった知識を獲得する。

展開3では、地図にはなぜすべての情報が正しく掲載されていないのかといった点を、「なぜ」といった発問形式で子どもに問う。展開1・2で確認した地図に関する事実の理由付けを追求する過程とし、地図は地域の情報をすべて・正しくのせているのではなく、地域の情報を再構成したものであるといった認識を獲得する。

展開4では、「何の地図か、誰が、誰に、何のために」という四つの視点を出し、地図は特定の目的のもとに使用・作成されるものであるといった地図構成論の根拠付けを行う。地図が地域事象を再構成していることの具体的事例として、広島市の地図や広電路線図を提示し、各々の地図がどのような目的のために作ら

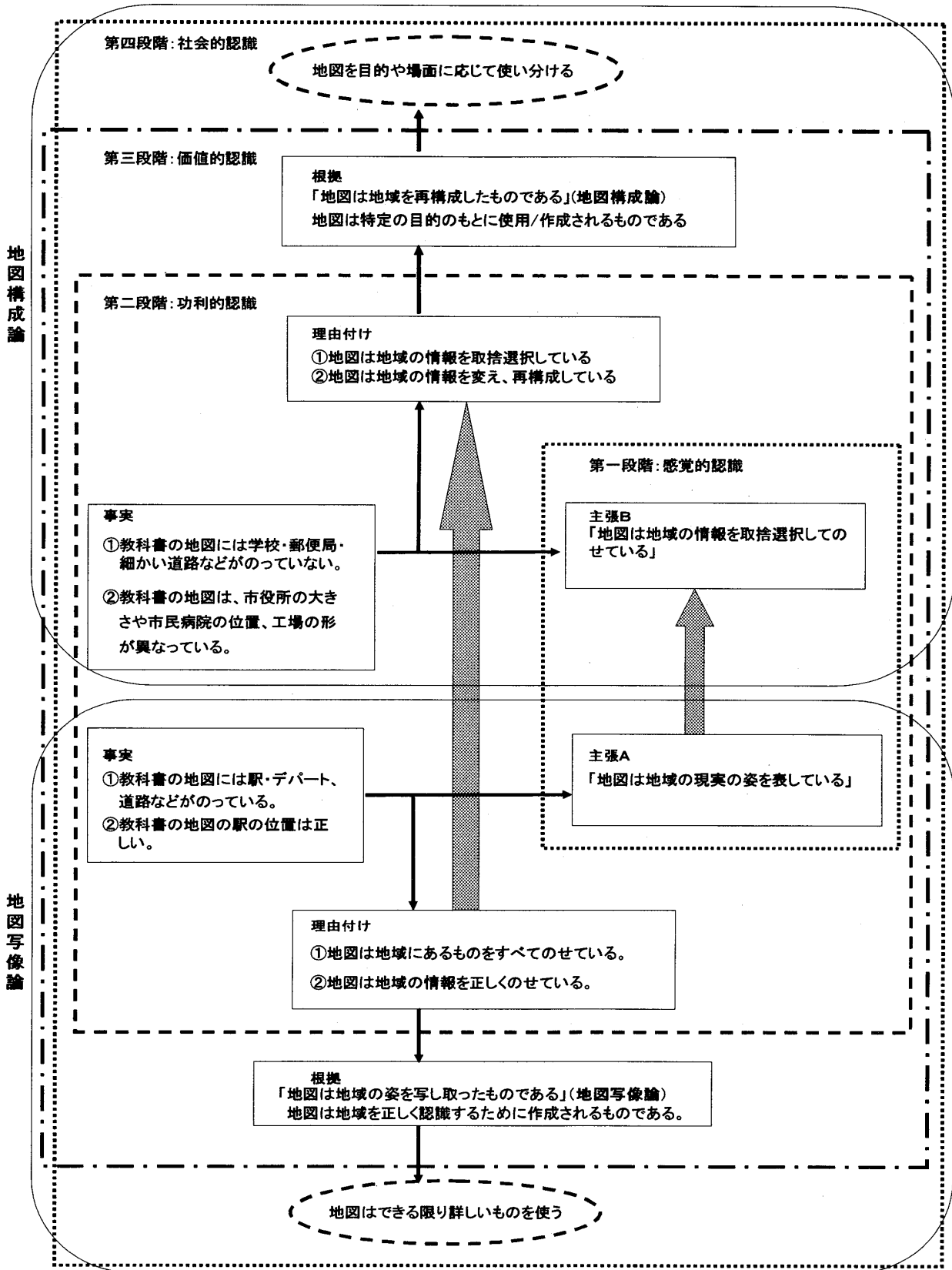


図: 地図に対する見方・考え方の構造

れているのかを検証してゆく。

展開5では、子どもたちに、これまで常識的に捉えられていた地図写像論に関する考え方や、授業で獲得された地図構成論に関する考え方を提示させ、両者を比較することにより、地図に対する見方・考え方の認識の変容を明確にする。

終結では、「原爆ドームに行きたいときにはどの地図を使うか」などの発問から、子どもたちに地図を選択させ、獲得した「地図は、地域の情報を再構成したものである」といった一般的な認識を、社会的認識まで引き上げてゆく。終結は、地図構成論にもとづいて実際の意思決定をする段階とし、目的に応じて地図を使い分ける過程を設定する。

本小単元の特徴は、次の二点にある。すなわち、第一に、地図写像論に関する子どもたちの見方・考え方を、地図に記載されている事実に基づいて自らが吟味・検証することによって、違った地図の見方・考え方（地図構成論）を獲得する学習過程として組織されていること、第二に、その獲得した地図構成論的見方・考え方に関して、具体的事例に即して根拠付けを行い、子どもたちの地図に対する新しい見方・考え方をより明確に獲得させていることである。

次章では、小単元の具体的な展開を示す。

4. 小単元「地図とはどのようなものなのでしょうか？地図について考えてみよう！」

(1) 小単元名 「地図とはどのようなものなのでしょうか？地図について考えてみよう！」

(2) 小単元の目標

以下の二点を理解することで、地図に対する見方・

考え方を育成することができる。

①地図に対する認識には、写像論のほかに、構成論の考えもあること。

②地図は、目的に応じて使い分けること。

(3) 到達目標

理解目標

①地図は、町のもの「すべて」を「正しく」のせているのではなく、作る人の考え（「必要なもの」、「伝えたいもの」）によって作り変えられていることを理解する。

i. 地図は、町のすべてをのせたものではなく、必要なものと不必要なものを取捨選択してのせていることを理解する。

ii. 地図は、必要なものはそのままの大きさではなく誇張してのせていることを理解する。

②地図は、作る人の目的によって様々な地図ができるので、これらの目的に応じて地図を利用していく必要があることを理解する。

i. 地図は、それを作った人の目的に応じて作られたものであることを理解する。

ii. 地図を目的に応じて使い分けることを理解する。

技能・態度目標

①地図に対して、違った見方があることについて考えることができる。

②地図は、特定の目的のために作成されていることを考えることができる。

③目的に応じて地図を利用することができる。

(4) 小単元の展開

パート	中心発問・指示	教授学習活動	資料	予想される子どもの答え
導入	・以前皆さんは地図について勉強しましたね。地図とはどのようなものでしたか？地図には何がのせてありますか？	T：発問する P：答える	資料① 三原市の地図	・地図は、町のようにのせたものである。 ・地図は、町を縮小したものである。 ・地図は、町のことを写真のように写しとったものである。 ・地図は、町のことをすべてのせている。 ・地図は、町のことを正しくのせている。
	〈「三原市の地図」を子どもたちに配る〉			・三原市の地図。
	・ではこれはどこの地図でしょうか？	T：発問する P：答える		・三原駅・三原城跡・広島大学附属三原小・中学校など。
	・この地図には何がのっていますか？あげてみよう。 ・この地図から、おかしなと思うものはないかな？	T：発問する P：答える T：発問する P：答える		・自分の家がのっていない。

	提案	◎では、地図とはどのようなものかな？くわしくみてみよう。	T：提案する		
展開1 (第一段階・感覚的認識)	主張Bの事実①の検証	○三原市の地図(資料①)には、すべてのものがのっているのかな？三原市の航空写真(資料②)と比べてくわしく見てみよう。 ・まずこの地図には何がのっていますか？ 〈教師は答えを板書する〉 ・航空写真と比べてみて、地図で気づいたことはないかな？	T：指示する T：発問する P：答える T：発問する P：答える	資料② 三原市の航空写真	・三原駅・三原城跡・広島大学附属三原小・中学校など。 ・地図にのっていないものもある。(例えば、住宅、店など) ・建物の名前が書かれている。
	まとめ	○この地図には、三原市にあるものすべてのせていたかな？ ・地図とはどのようなものかな？	T：発問する P：答える		○三原市にあるものどれもこれものせていない。 ・地図とは、写真のように写しとったものでない。 ・地図とは、町のもののがのせてあったり、のせていないものがあったりする。
展開2 (第一段階・感覚的認識)	主張Bの事実②の検証	○地図にのっているものは(形・大きさ・位置など)を正しくのせているかな？航空写真と比べてくわしく見てみよう。 ・例えば、三原駅は実際こんな四角形をしているかな？ 〈子どもたち全員に地図にのっているものの、以下の課題について検討させる〉 〈課題〉 ①形 ②大きさ ③位置 ④その他	T：指示する T：発問する P：答える P：検討する(5分) P：発表する(3分)		・していない。もっと複雑な形をしている。 ①省略されている。 ②大きく書かれている。 ③ずれている。 ④建物の名前が書かれている。
	まとめ	○この地図にのっているものの、(形・大きさ・位置など)正しくのせてあったのでしょうか？ ・地図とはどのようなものかな？	T：発問する P：答える		○この地図にのっているものは正確にのせているといえない。 ・町のをそのまま正確にのせていないのではないか。
展開3 (第二段階・功利的段階)	主張Bの事実①・②に対して理由付けを行う	〈班別に分かれて子どもたちに以下の課題について検討させ、各班で気づいたことを 班長が発表する〉 〈1～4班 課題①〉 ・三原市のこの地図には、おもにどんなものがのっていましたか？ 1. なぜ地図は、町のもの「すべて」をのせていないのでしょうか？地図を作った人は、なぜ駅や寺や神社などしか地図にのせなかったのでしょうか？ 2. もし「すべて」のものを地図にのせたらどうなるのでしょうか？	T：発問する P：答える P：検討する(5分) P：発表する(3分)		・三原駅・三原城跡・宮浦公園・寺・神社など。 ・地図を作った人が、町の重要なもの・必要なものだけをのせているから町の「すべて」のものはのせていない。 ・地図を作った人は、すべてのせる必要がないと思っている。 ・必要なものだけをのせればよいと思っている。 ・その数は多くなり、入りきれない。

<p>主張Bの事象①・②に対して理由付けを行う</p> <p>展開3 (第二段階・功利的段階)</p>	<p>〈5～8班 課題②〉</p> <p>1. なぜ地図は、のせてあるものの形・大きさ・位置などを「正しく」のせていないのでしょうか？</p> <p>2. もし、のせるものの形・大きさ・位置などを「正しく」のせるとうなるのでしょうか？</p>	<p>T：発問する P：検討する (5分)</p> <p>P：発表する (3分)</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・地図を作った人が、地図を見る人に、わかりやすいようにのせているのではないか。 ・地図を作った人が、見る人に印象を与えるためにわざと大きくのせているのではないか。 ・地図上では小さすぎてのせられない。
	<p>まとめ</p> <p>○これまで学んできたことから考えると、地図はどんなものといえるのでしょうか？</p>	<p>T：発問する P：答える</p>		<p>○地図は、町のどれもこれも「すべて」を「正しく」のせているのではなく、作る人の考え(「必要なもの」、「伝えたいもの」)によって作りかえられたものではないか。</p>
<p>主張Bの理由付けに対して根拠付けを行う</p> <p>展開4 (第三段階・価値的段階)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地図を作った人には、どのような考えがあるのかをくわしくみていきましょう。 <p>〈子どもたちに、地図を作る人の考えを、広島市の地図・広電路線図をもとに検討させる〉</p> <p>〈広島市内の詳細な地図を示す〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これはどこの地図でしょうか？ <p>〈広電電車路線案内図を示す〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これも広島市内を表わしていますがだいぶちがいますね。どこがちがいますか？こちらの地図は何を示しているのでしょうか？ ・これで何がわかるでしょう？ ・たとえば、広島駅から広島港までは、どの路線番号で行くのが一番早いですか？またそれは何分で行きますか？ ・この地図(資料④)で、自分の行きたいところへ行く場所・時間がわかりますが、広島市の地図ではわかりますか？ ・ではこの地図は、「誰が」「誰に」「何のため」に作ったものなのでしょうか？ <p>〈各班で考えて代表的な班長に発表させる〉</p> <p>〈教師は、以下のように板書しまとめる〉</p> <p>何の地図か (広島電鉄電車路線図)</p> <p>誰が (広島電鉄の人) が、誰に (電車を利用する人) に、何のために (自分の行きたいところへ行く場所・時間を知る) ために、作った。</p>	<p>T：指示する</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>P：検討する (5分)</p> <p>P：発表する (3分)</p>	<p>資料③ 広島市内の地図</p> <p>資料④ 広電電車案内図</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・広島市の地図。 ・広島市内の路面電車の地図。 ・自分の行きたい場所と、そのためにかかる時間。 ・5番線で、28分。 ・わからない。 ・この地図は、「広島電鉄の人」が、「電車を利用する人」に、「自分の行きたいところへ行く場所・時間を知る(目的)」ために作られている。

	まとめ	○今日、これまで学んだことから地図はどんなものかといえるでしょうか？	T：発問する P：答える		○地図は、作った人が、伝えたいこと「目的」によって、のせる内容が決められ、様々に作り変えられている。
	展開5 主張AとBの比較	○地図とはどのようなものか、これまでの地図に対する考え方と、今日学習した地図に対する考え方を子どもたちにそれぞれあげさせる。	T：指示する P：答える		<p>〈教師が黒板にそれぞれ板書する〉 (これまでの地図に対する考え方)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地図は、町のようにすのせたものである。 ・地図は、町のことを写真のように写し取ったものである。 <p>(今日学習した地図に対する考え方)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地図は、町のものすべてをのせていない。 ・地図は、町のことを正しくのせていない。
終結 (第四段階・社会的認識)	地図に対する新しい主張を行う	<p>○今日学習したことから、私たちはこれからどのように地図を使っていかなければならないでしょうか？</p> <p>〈教師は具体的な目的を挙げて、子どもたちに地図を選択させる〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・原爆ドームに行きたいときはどの地図を使ったらいいだろう？ 	<p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p>		<p>○地図は、作る人の目的によって、様々な形に作られるのでこれを理解した上で、目的に応じて地図を利用していく必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広電の電車路線案内図。

【資料出典】

- ①『三原市の地図』三原市，2004年。
- ②『わが街空撮 三原市』中国新聞社，2000年，p.7。
- ③『広島市ビジネスマップ』昭文社，2003年。
- ④『広電電車路線案内図』広島電鉄，2003年。

IV. 結 語

本研究の目的は、小学校社会科においても見方・考え方の育成を行う授業が組織できることを示すことであった。この課題に対して、以上において示した地図の授業により、次の三点が達成された。

第一は、小学校においても、見方・考え方の育成は可能であり、そのような授業を組織できる。第二は、見方・考え方の育成方略は中学校社会科授業の場合と同様に、複数の見方の設定、その獲得、相互の比較・検討、有効性の理解というものであった。第三は、子どもたちの見方・考え方の習得状況から考えて、小学校社会科と中学校社会科とによって育成する目標を変える必要がある。

このようなことを明らかにすることにより、子どもたち自身において社会に関する見方・考え方を拡大・成長することを実現し、新しい社会に関する認識、見方・考え方を習得し、市民や国民として社会の形成に果たす資質を育成することができることを示したのである。

しかしながら、それは、指導案の提示レベルであり、開発した指導案にもとづいて実施された授業のなかで現実に子どもたちが学習したものは、いかなるものであったかを検討してはじめてそのような結論が出せるであろう。本稿では、ひとまず、結論を予測しておくことに留めておく。

付記：

本研究に多大な支援と協力をいただきました、小原友行校長をはじめ、広島大学附属三原小学校の先生、子どもたちに、深く感謝いたします。

【注】

- 1)『小学校学習指導要領（平成10年12月）』大蔵省印刷局，1998，p.22。
- 2)『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版，1999，p.3。
- 3) 同上，pp.132, 133。
- 4) 池野範男『小学校社会科と補充的な学習，発展的な学習～一人一人の学習の成長を保障する教育～』大阪書籍，2004，pp.6-7。
- 5) 池野範男・渡部竜也・竹中伸夫『「国家・社会の形成者」を育成する中学校社会科授業の開発－公民単元「選挙制度から民主主義社会のあり方を考える」－』『社会科教育研究』No.91, 2004, 池野範男・

- 渡部竜也・竹中伸夫「認識変容に関する社会科評価研究(1)」広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター『学校教育実践学研究』第10巻, 2004, 参照。
- 6) 『小学校指導書 社会編』大阪書籍, 1969, p.94。
7) 同上, pp.95-96。
8) 同上, p.94。
9) 『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版, 1999, pp.129-132, 参照。
10) 野村正七「地図と地図記号」『初等教育資料』1970年9月号, p.20。
11) 同上。
12) 大澤克美「3年でおさえたい地図指導の基礎基本」『教育科学社会科教育』1990年9月号, No. 341, p.53。
13) 『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版, 1999, p.46。
14) 野村, 前掲論文, p.20。
- 15) 大澤, 前掲論文, p.52。
16) 本研究では, 地図に対する認識や公民的資質を対象とする評価方略を示し, 選択式評価問題にてそれを進めることができることも示したいが, 本稿では, 評価方略や評価問題については取り扱わない。別稿にて論ずる。
17) 主に, 堀淳一「『地図論』論」堀ほか『地図の記号論』批評社, 1990, 堀淳一『地図』現代書館, 1992, 若林幹夫『地図の想像力』講談社, 1995を参照した。
18) 本小単元の小学校社会科授業と, 選挙制度に関して開発した中学校社会科授業との違いは, 見方・考え方の学習内容にある。小学校の場合には, 新しい見方・考え方への出会いとその学習に重点があり, 中学校の場合には二つの見方・考え方の比較・検討とその原理的相違の学習に重点がある。中学校の場合には, 見方・考え方の学習レベルをより深くそしてより高く設定しているわけである。